

## 「家族や身近な人との絆を見つめなおす」

3組 E.A

年末年始に毎年、私は母の実家の京都に遊びに行きます。私はこの期間を一年の中で一番楽しみにしています。なぜかという、従兄弟や親戚の人たちに久しぶりに会えて嬉しい、集まった皆で行うゲームはとても盛り上がり、その場の華やかで明るい雰囲気が大好きだからです。そして、大晦日は年越しそばを食べながらテレビを皆で見て、元日にはおせちを食べることや、お年玉を頂くことや、従兄弟と羽子板をすること・・・など、私の中でうれしいイベントがその期間に集中しているからです。

しかし最近、ただ皆と遊べるからとか、旅行気分、などそういう理由で楽しみにしているのではない、娯楽としてだけで楽しいのではなく、何か他の特別な理由があって、この年末年始の期間が私の中で輝いていると思うようになりました。

そこで、今回の感話のテーマ「家族や身近な人との絆を見つめなおす」ということについて考えてみて私は、従兄弟や親戚との絆があるからこそ、その期間が私にとってなくてはならない大切な時間になっているということに気づかされました。改めて考えてみると、その皆がいなければ私が楽しみにしているイベントの数々は存在しません。そしてその絆、お互いあまり気を使わないでいられ、小さかった時からずっと一緒にいるその関係があるからこそ、心からくつろげる和やかなその空間、時間が出来上がるのです。

しかしこのような、年に一度に集まる従兄弟や親戚との絆、のようなもの以外にも絆はあるのではないかと私は考え始めました。そうすると、多くの異なる形の絆があることにどんどん気づかされていったのです。

例えば、梅ヶ丘教会で行われた課外オーケストラによる演奏での出来事があります。私はオーボエという楽器を練習しており、その発表の時は、先輩と二人でその楽器を担当することになっていました。しかし発表の当日、先輩が体調を崩してしまい、先輩が吹くはずだったメロディーの部分を私が担当することになってしまいました。そのメロディーは他の楽器が奏でるメロディーと違った動きをしていて、ミスするとすぐに気づかれています。勢いよく先輩に任せて下さいとは言ったものの、緊張と不安で当日の昼御飯にあまり手をつけられない程でした。そんな時吹く勇気を与えてくれたのが、その場にいたオケの三年生の皆でした。本番が始まるまでずっと励ましてくれて、私が元気になるために、「私のいいところを言い合う会」まで開いてくれました。コートが似あっているね、とかオーボエの練習頑張っているね、など多くの温かい言葉をもらって、本番を何とかのりきることができました。やり通そう、という力が湧いたのは友達との絆のおかげです。発表が終わった後は、先輩から心からの感謝のメールを頂き、絆も感じた出来事でした。

ここまでいくつかの種類絆について考えてきて気づいたことは、どの絆もその絆なりに違った方法で、私たちの生きる原動力になっているということです。年末年始に一度だけ会う従兄弟や親戚との絆も、たまにしか会わないからこそ、お互いに忙しい日々のなかの息ぬきになり、休憩したから今年も頑張るぞ、という気持ちにさせられます。友達との

絆、先輩と後輩の絆、家族の絆、以前はちゃんと見えていなかった多くの絆のなかで、私たちは成長していくということに改めて気づかされました。だから、けんかばかりしている関係でも、あいさつ程度の関係でも、それはそれで切っても切れない絆の一つで、その関係があることにより学ぶことも多くあると考えることができます。だからたとえ温かい関係でなくとも絆は、私たちが前に進むための土台や手助けするものであり、なくてはならないものです。